

「室町文化をめぐって」

科目担任：李守愛 先生

学生名前：頼宛秀

学籍番号：9612005M

はじめに

室町時代(1336～1573)の武家を中心とした文化の展開についてみた場合、十四世紀後半および十五世紀後半のふたつの時期は大きなうねりの時期であった。これらの時期は前期を三代将軍足利義満(1358～1408)の造営した北山山荘に、後期を八代将軍義政(1436～90)の造営した東山山荘にちなみ、それぞれ北山文化・東山文化とよばれている。両文化を貫いて流れる基調音のひとつとして禅宗が存在したことはよく知られたところである。

一、北山文化について

北山文化とは、室町幕府3代将軍「足利義満」のころ栄えた文化のことである。義満が造営した「北山山荘」が代表的なもので、有名な「鹿苑寺金閣」は、その一部である。

この文化の大きな特徴として、「公家文化」と「武家文化」の融合があげられる。義満の時代になると、南北朝の合一もなり、幕府の権力が確立し、政治も安定するようになった。そして「足利尊氏」が、京都に幕府を開いて以来、地方武士が上洛し、住みついたことで、将軍家を中心とする武家文化が形成されるようになったのである。そして、それが、平安時代以来の伝統的な「公家文化」と鎌倉時代以来の新興の「武家文化」が融合するようになった要因といえる。また、室町幕府が「禅宗」を保護し「勘合貿易¹」が開始されたことから、禅宗に代表される「中国文化」の影響も大きく受けた文化だということもできるであろう。

1401年、義満は九州の商人肥富と僧祖阿を明に派遣して修好を求め、これにより日明間に公的な通交が開始された。義満には明皇帝より「日本国王」の号が与えられ、日本は明を中心とする東アジアの冊封体制に参入することになったのである。唐物崇拜からはじまって遣明船派遣へと展開した義満の一連の中国崇拜の行動は、時として「中国かぶれ」とまで評されるほどであった。

¹日明貿易は、日本の室町時代に日本が中国の明王朝に行った朝貢貿易である。貿易の際に、許可証である勘合符を使用することから勘合貿易(かんごうぼうえき)とも呼ばれる。

二、 東山文化について

東山文化とは、室町幕府8代将軍「足利義政」のころの文化である。義政が応仁の乱を避け 晩年にいとなんだ「東山山荘」を中心に生みだされた文化で、有名な「慈照寺銀閣」は、その一部である。

政治への無力感と絶望を抱いた義政は、この山荘で法会や遊楽や歌会を楽しみ、同朋衆ら²を多く近侍させ東山文化とよばれる新しい文化の創造と享受にふけたのであった。

この文化は、「公家文化」と「武家文化」に加え、「禅宗文化」や新興の「庶民文化」がまじりあった複合的なもので、「わび・さび」などの余情と簡素を重んじる美意識が発達した。また、東山山荘などにみられる「枯山水³」の庭園をはじめ、「書院造⁴」とよばれる和風住宅様式が発生するなど、生活文化的要素も強く、やがて、日本の伝統文化の源流となり、その後の日本人の生活様式や美意識に強い影響をあたえたといえるであろう。

三、 金閣と銀閣について

1397年、足利義満は西園寺家から衣笠山麓の地を譲りうけ北山山荘の造営に着工した。現在、金閣寺の通称でよばれている鹿苑寺である。

金閣は寝殿造と禅宗様を折衷させた楼阁構造で、初層が寝殿造の「法水院」、二層は「潮音洞」、三層が禅宗仏殿風な「究竟頂」から構成されていたが、二層には観音像、三層には阿弥陀三尊像および二十五菩薩像など浄土教の緒尊が安置されており、これは禅宗に帰依しながらも浄土教的性格を多分に備えていた義満の信仰を端的に示したものとされている。1950年に焼失し、その後復元再建された。

足利義政は、1482年から八年の歳月をかけ、東山如意ヶ嶽の麓、天台宗浄土寺の旧地に洛西西芳寺を範として東山山荘を造営した。山荘は、彼の死後、遺言により同じく禅寺に改められ慈照寺と号した。観音殿は、初層が書院造住宅の「心空殿」、上層が禅宗仏殿様式の「潮音閣」の二層構造であり、住宅と

² 室町時代、足利将軍家に近侍し、身の雑事からはじまって美術品の鑑定と緒芸能にたずさわわり、室町文化の形成に大きな役割を果たした僧体の特殊技能集団が存在した。

³ 枯山水とは、室町時代の禅院の「作庭様式」の一つを指す。もともとは、唐山水からできた言葉で、水を用いず、砂と石で自然の生命を表現することを特徴としている。狭い長方形の平庭に白砂と大小15の石を配置した「竜安寺石庭」は、その代表的なものである。また、夢想疎石が作った西芳寺庭園の上段にも枯山水が用いられている。

⁴ 書院造とは、室町時代に成立した「住宅建築様式」のことである。住宅内部の座敷飾りとして、床、棚、付書院などを持ち、明障子や襖を多く用いた。これは、禅院の書斎の影響を受けているものと思われる。また、この書院造は、現代日本住宅の基本となっている様式で、現在でもその影響を受けた建築物が多く見られる。

この様式の代表的な建物としては、室町幕府8代将軍「足利義政」が営んだ「東山山荘(後の慈照寺)」の「東求堂」で、特に義政の書斎で茶室にも利用されたという一室「同仁斎」が有名である。

禅宗仏殿上下に重ねた造形は金閣につうじるものであるが、寝殿造が消滅し書院造の意匠に統一されている点が金閣とは異なる。

ちなみに、義満の北山山荘には公家風の儀式用施設である寝殿があったが、義政の東山山荘はそのような施設を欠いており、隠居所的性格が強いことが特徴のひとつであるとされている。義満同様に、禅に傾倒しながらも心は深く浄土にあこがれた義政の信仰の内面を示したものと考えられている。

四、 東山文化と禅

義政の時期、幕府の弱体化により五山派禅宗の衰退と和様化が進んでいた。ところが、禅の思想そのものは、五山外の大徳寺や妙心寺の積極的な民衆布教とも相まって、社会のすみずみにまで一種の教養として深く浸透することになり、芽生えはじめていた新しい文化を育む温床になった。これは東山文化の大きな特色のひとつであろう。

この時期作庭に従事していたのは「泉石の妙手」と称された善阿弥や、東山山荘の作庭に従ったその子又四郎などの名手が現れたのである。当時の庭園の主流は禅の枯山水（石庭）であって、「三万里程を尺尺に縮める」（『仮山水并序』）とされたように石組をもって全宇宙を狭い土地に象徴的に表現したものであった。禅寺の作庭や禅僧らとの交渉をつうじて、かれらは次第に禅の境地に到達し、独自の作庭理論を生み出していったのである。

また、茶の湯の成立に与えた禅の影響も大きかった。もともと禅宗の茶礼から発達した茶の湯は、義政の時代にはいわゆる書院の茶が流行しており、これは唐物の絵画や陶器を鑑賞しながら茶を楽しむ豪華で高尚な茶の湯であった。これに対して、禅の精神を基調に四畳半の茶室を工夫して、いわゆる「侘び茶」を創始したのが村田珠光である。その後、「侘び茶」が武野紹鷗を経て千利休にいたり大成されることである。

絵画では水墨画の新しい様式を確立したとされる雪舟である。備中国から上洛して相国寺に入り、画技を周文に学んだ雪舟は、1476年に入明、翌年に帰国し、以後は全国を旅しながら、宋・元画の長い研鑽の上に中国・日本の山水自然への観察を加え、独自の画境を描き出すことに成功した。

五、 能の歴史をめぐって

大成前

能の源流をたどると、遠く奈良時代までさかのぼる。当時大陸から渡ってきた芸能のひとつに、[散楽]という民間芸能があった。器楽・歌謡・舞踊・物真似・曲芸・奇術などバラエティーに富んだその芸は、[散楽戸]として官制上の保護を受けて演じられていたが、平安時代になってこれが廃されると、その役者たちは各地に分散して集団を作り、多くは大きな寺社の保護を受けて祭礼などで芸を演じたり、あるいは各地を巡演するなどしてその芸を続けた。

この頃には【散楽】の名も日本風に猿楽・申楽と呼ばれるようになり、芸の内容も次第に滑稽な物真似が主体となっていく。

時代とともに単なる物真似から脱皮して、様々な世相をとらえて風刺する笑いの台詞劇として発達、のちの【狂言】へと発展していくのである。一方、農村民俗から発展した【田楽】、大寺の密教的行法から生まれた【呪師芸】などの芸もさかんに行われるようになり、互いに交流・影響しあっていた。

鎌倉中期頃には猿楽の集団も寺社公認のもと「座」の体制を組み、それまでの笑いの芸能とは別に、それらの芸能や当時流行していた【今様】・【白拍子】などの歌舞的要素をとり入れた、一種の楽劇を作り上げていく。

このような物語的要素の色濃い楽劇と、笑いの芸能【狂言】とをとりまぜて上演するという猿楽の形式は、現代の能楽の上演形式にも踏襲されている。

大成期の能楽

田楽・猿楽の諸座が芸を競う中、南北朝の頃になると、大和猿楽と近江猿楽が頭角をあらわしてくる。大和猿楽は、興福寺に奉仕する猿楽四座(観世・金春・金剛・宝生座)で、14世紀後半を代表する名手観阿弥を生んだ。観阿弥は、将軍足利義満の支援を得て、大和猿楽の伝統である物真似主体の強い芸風に田楽や近江猿楽などの歌舞的要素をとり入れて芸術的に高めたほか、当時流行していたリズムカルな【曲舞】の節を旋律的な【小歌節】と融合させるなど音楽面での改革をも行って、大いに発展を促した。この父、観阿弥の偉業を受け継いで今まで伝わる能の芸術性を確立したのは世阿弥である。

世阿弥は「夢幻能」というスタイルを完全な形に練り上げ、主演者である「シテ⁵」一人を中心に据えた求心的演出を完成させて、多くの作品を残した。

世阿弥没後も、その甥、音阿弥や、女婿、禅竹といった名手や理論家が輩出されたが、その能は本質的には世阿弥の継承であり、この時代すでに能は、伝統を守り育てる傾向を強めていたといえよう。

一方、室町後期には「手猿楽」と呼ばれる素人出身の能役者が、京都などで大いに活躍した。また、謡曲を能から離れて謡ういわゆる「謡」が流行したのもこの時期からで、能が町人階層にも広く愛好されていたことがわかる。

戦国時代から桃山期の能楽

応仁の乱以降の幕府の弱体化や寺社の衰退は、能に大きな打撃を与えた。田楽も近江猿楽もほとんど消滅し、16世紀後半には有名大名を頼って地方へ下る能役者が続出した。

なかでも、織田信長は、能に対して好意的だったことが知られているし、豊臣秀吉はさらに熱狂的な愛好家であった。彼は自身でも好んで能を舞ってみせたほか、多くの「座」のうちから大和四座に扶持を与えることを定めた。能役者は、社寺の手を離れて武家の支配を受けるようになったわけである。なお、

⁵能に登場する人物のうち、主となって舞を舞う主人公である。

残存していた他の群小猿楽座は、一部の役者が四座に編入された以外すべて消滅してしまったようである。

この時期、豪華絢爛な桃山文化の隆盛を背景に、豪壮な能舞台の様式が確立され、装束も一段と豪華になったほか、能面作者にも名手が輩出し現在使われている能面の型がほぼ出揃った。演出や詞章についても整備が進み、狂言にも名手が続出したこの時代は、能楽の復興期であるとともに大きな転換期でもあった。

江戸時代の能

新たに喜多流が一流樹立をして、四座一流が幕府の「式楽(儀式用の芸能)」と定められた。この四座一流には大夫職が設けられ、能の中心は江戸に移って能役者の生活も安定する。また、地方の有力諸藩も幕府にならって四座一流の弟子筋の役者を召し抱えたのであった。

しかし、幕府や諸藩は能楽の保護者であると同時に厳しい監督官でもあった。頻繁に出される厳しい通達によって、技芸の鍛錬と伝統の正確な継承を要求された結果、能はだんだんと重々しさを増し一曲の所用時間も長くなって、気力と体力を消耗する厳しい芸質へと変化していった。同時に、ワキ方・囃子方・狂言方などの細かい役割分担が分化確立し、大夫を中心とした家元制度⁶に守られた「座」付の体制が整備されたことによって、逆に能楽の歴史の流れの中では自由な発展性が閉ざされる結果となったともいえよう。

とはいえ、定まったそれぞれの曲の中での創意工夫は、「小書」という特殊演出を生んだ。また実際に接する機会といえば「勧進能」「町入能」などといった特殊な場合に限られてはいたものの、町人の間に謡本が普及したことによって「謡」が全国的に広まった。

終わり

北山文化をへて東山文化で完成された。この時代には、優美で伝統的な公家文化と、力強くそばくな武家文化がとけ合い、中国の宋・元・明の文化や禅宗の影響を受けて、簡素で深みのある文化が生まれた。

参考文献

『日本仏教史 室町時代』P24~P44

<http://www.pat.hi-ho.ne.jp/hirosilk/y171.htm> 歴史用語解説

<http://www.nohgaku.or.jp/encyclopedia/whats/history.html> 社団法人能楽協会

⁶ 日本の芸道など家伝として承継している家系のことである。